

# 施設見学が福祉専攻大学生の心的状態に与える 影響の検討

— 高齢者，障害者，子どもに対するイメージ，実習に対する不安，  
自己効力感に焦点をあてて —

The Effect of Call on Homes on Mental Conditions in Social Work  
Students : Focus on Images of Old Age, Handicapped Persons,  
Children, Anxiety of Social Work Training, and Self-efficacy.

河野理恵・鳩間亜紀子・渡邊浩文・加藤尚子

(Kawano Rie, Hatoma Akiko, Watanabe Hirofumi, Kato Shoko)

## Abstract :

The purpose of this study was to examine the effect of call on homes on mental conditions in social work students. Questionnaires were measured on 2 occasions : the first, to measure before call on homes, and the second, to measure after call on homes. In both occasions, questionnaires were administered to measure images of old age, handicapped persons, children, anxiety of social work, and self-efficacy. The results indicated that social work students held positive images about old age, handicapped persons and children in both conditions. There weren't no differences in images of old age, handicapped persons, children, anxiety of social work training, anwere self-efficacy on 2 occasions. .

キーワード：施設見学 利用者に対するイメージ，現場実習に対する不安，自己効力感

Key Word : call on homes, images of old age, handicapped persons, children, anxiety of social work training, self-efficacy

## <目的>

今日，少子高齢化や障害者の自立支援，雇用などの社会情勢の変化に伴い，わが国の福祉職には多大な社会的役割が期待されている．本学においても，平成16年4月に人間福祉学科が設置され，将来，福祉職者として活躍するであろう学生の育成が開始された．カリキュラムにおいて1年次では，福祉に関する専門的な教育が

行われ，基本的な知識と技術を修得することが求められる．また，本学ではそのような大学における授業の他に施設見学<sup>1)</sup>を行なうことを含む必修科目が存在する．施設見学とは，15名の学生グループと引率教員が，高齢者福祉施設（特別養護老人ホーム），障害者福祉施設（知的障害者更正施設），児童福祉施設（児童養護施設），相談機関（児童相談所，福祉事務所）の

かわのりえ：人間社会学部人間福祉学科専任講師

はとまあきこ：人間社会学部人間福祉学科助手

わたなべひろふみ：人間社会学部人間福祉学科助手

かとうしょうこ：人間社会学部人間福祉学科専任講師

4領域すべてをそれぞれ1施設ずつ見学するものである。これは、早い時期から社会福祉の現場を経験することにより、学生が社会福祉に対する理解を深めさせ、後に続く、社会福祉士の国家試験受験資格を得るための指定科目である「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ、Ⅲ」への心構え、意欲などを形成させることを目的としている。福祉教育における「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ、Ⅲ（以後、現場実習と呼ぶ）」は、既習の知識や技術を応用しながら、理論と実践を統合する重要な科目であり、本学では2年次以降に履修することになっている。そこでは、学生ひとりひとりが延べ180時間以上、直接利用者と関わり、福祉現場を経験することによって、福祉知識に基づく実践を行い、コミュニケーションスキル、利用者、指導スタッフ、及び実習指導者との関係の構築など様々なことを修得することが必要となる。

学生は、現場実習に対して、不安、意欲、期待など様々な感情をもつと考えられる。とりわけ、初めて行なう現場実習に緊張し、様々な個人的背景をもつ福祉施設や機関の利用者の理解やコミュニケーションに困難感を感じることで、現場実習に対して不安意識をもつ学生が多いであろうことは想像に難くない。鈴木(2002)は、社会福祉実習生の不安に関する調査において、実習生は実習前に多くの不安を感じており、特に「実習生としてきちんとできるか」という知識に関する不安と「利用者とうまくやっけていけるか」という利用者とのコミュニケーションに関する不安が顕著であることを明らかにしている。

このように、現場実習は不安というネガティブな側面を誘発させる一方、自己効力感を形成させるというポジティブな側面があることも指摘できる。自己効力感とは、特定の事態に対して「このくらいはできる」と知覚された可能性の認知のことを意味する(Bandura, 1977)。これは、人がある行動を起こす前に感じる遂行可能感のことを指しており、教育や臨床領域においては、行動変容の予測に利用され、教育や介入により操作可能なものと考えられている。つまり現場実習では、実際の施設、機関などで

様々なことを経験することにより、学生の自己効力感が高められ、積極的に行動できるようになると予測されるのである。そのため、自己効力感は現場実習の効果を検討するための指標となっていることが多い。従来の研究では、看護実習において利用者の役に立てたと感じた時や、他者から褒められた時に自己効力感が高くなっていたことが明らかにされている(豊嶋・堤, 2005)。また、看護実習前よりも実習後の方が学生の自己効力感が高くなっていたことも報告されている(吉井・野本・河野, 1999, 山崎・阪口・百瀬, 2001)。すなわち、現場実習における経験が学生の「自分ではできる」という確信を形成させていると言えるだろう。

このような学生の現場実習に関するネガティブな側面とポジティブな側面の実態を、現場実習の前後のみならず、本学における施設見学のような早い時期から理解しておくことは非常に重要である。なぜなら、学生の心的状態を長い間、継続的に把握しておくことは、彼らの詳細な心の変化を理解することになり、適宜、個々の学生に応じた指導につながると考えられるからである。つまり、指導者側にとっては、高度な職業人の育成のための、より適切で、効果的な実習の提供に不可欠なものであると言えるだろう。また、そのような指導者側の学生理解の観点には、実習に対するネガティブな側面とポジティブな側面に加えて、学生が福祉施設や機関を利用している人々に対してどのようなイメージを抱いているのかという、より基本的な事項も把握しておくことが重要であろう。このようなイメージは福祉に携わる人間の根本にも関わってくる事柄であり、実習指導の上で重要な知見になると考えられる。

そこで本研究では、施設見学を行なう前(以後、見学前と呼ぶ)と施設見学を行なった後(以後、見学後と呼ぶ)それぞれにおいて、高齢者、障害者、子どもに対するイメージを明確に示すとともに、その後に行なう現場実習に対する不安、自己効力感を測定し、学生の心的な実態を明らかにする。同時に、そのような心的状態は、見学前と見学後において違いが生じているのかという検討を行なうことを目的とする。

## <方法>

### 1 調査対象者

2004年度に目白大学人間社会学部人間福祉学科に入学した大学生。見学前の調査は123名（男性63名，女性60名：平均年齢19.05歳，SD=2.29），見学後の調査は124名（男性61名，女性63名：平均年齢19.49歳，SD=2.26）であった。

### 2 実施時期

見学前の調査：2005年10月下旬。人間福祉学科に入学してから約半年後であり，施設見学に対して具体的な授業が実施される前であった。

見学後の調査：2005年5月上旬。施設見학을2005年2月に経験した後であった。

### 3 社会福祉援助技術現場実習に関する意識調査

社会福祉援助技術現場実習に関する意識調査は，基本的属性，希望する実習先などを聴取するフェースシート，及び高齢者，障害者，子どもに対するイメージ，現場実習に対する不安，自己効力感，援助活動の基盤（価値観，個人の知識，技術）を問う項目から構成され，個別記入形式の質問紙調査で実施された。本研究では，現場実習に対する不安，高齢者，障害者，子どもに対するイメージ，自己効力感などの心理的側面について検討を行なった<sup>2)</sup>。

#### 1) 高齢者，障害者，子どもに対するイメージ

高齢者，障害者に対するイメージを測定するために，河野（2003）の高齢者イメージのSD評定法に使用された質問項目の中から10項目を使用した。障害者のイメージを問う場合には，「高齢者」を「障害者」に置き換えて用いた。また，子どもに対するイメージの測定には，従来の子どものイメージとして考えられるものを10項目独自に案出した。このようにして，高齢者，障害者，子どものイメージを測定するために，それぞれ10項目設定し，調査対象者には「たいへんそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で回答を求めた。

#### 2) 現場実習に対する不安

まず最初に，調査者が日本版顕在性不安尺度（MAS：Manifest Anxiety Scale），日本版STAI-Y（State-Trait Anxiety Inventory）の中から，社会福祉を専攻とする学生の現場実習に適すると思

われる項目を選択した。その後，社会福祉を専門領域としている3名に対して意見を求め，現場実習に対する不安を表すことができるように質問項目の削除，修正を行なった。このようにして，合計10項目を決定し，現場実習に対する不安を尋ねる質問紙を構成した。この10項目に対して，調査対象者に「たいへんそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で回答を求めた。

#### 3) 自己効力感

本研究では，個人が一般的にセルフ・エフィカシーをどの程度認知しているのか測定する一般性セルフ・エフィカシー尺度（坂野・東條，1986）を使用した。質問項目は16項目であり，調査対象者には「たいへんそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で回答を求めた。

#### 4 手続き

調査は，授業終了後に集団法で行なわれた。実施所要時間は，15分程度であった。見学前と見学後の両方の調査を開始する前に，本研究の目的とプライバシーの保持についての説明を行なった。

## <結果>

### 1 高齢者，障害者，子どもに対するイメージ

各項目について，「たいへんそう思う」を4点，「まったくそう思わない」を1点として得点化した。見学前と見学後の調査における平均と標準偏差をTable 1に示す。また，平均をグラフ化したものをFigure 1，2，3に示す。見学実習を含む6ヶ月間の授業を経験することにより，高齢者，障害者，子どもに対するイメージに変化があったのかを検討するために，項目ごとに1要因の分散分析を行なった。その結果，「子どもは元気だと思いますか」において5%水準で有意差が見られ（ $F(1,245)=4.00, p<.05$ ），見学後の調査の方が，子どもを元気だと思わなくなっていた。また，「高齢者はあたたかいと思いますか」，「障害者はひまそうだと思いますか」において10%水準で有意傾向が見られ（それぞれ， $F(1,245)=2.81, p<.10$ ， $F(1,245)=3.60, p<.10$ ），見学後の調査の方が，高齢者をあたたかいと思うように，障害者をひまそうだと思う

Table 1 高齢者、障害者、子どもに対するイメージの平均と標準偏差、及び分散分析の結果

	項目	見学前		見学後		分析結果
		M	SD	M	SD	
高齢者	1 高齢者はにぶいと思いますか	2.73	.68	2.58	.78	
	2 高齢者はよわよわしいと思いますか	2.63	.77	2.62	.77	
	3 高齢者はあたたかいと思いますか	3.21	.62	3.35	.65	+
	4 高齢者は明るいと思いますか	2.98	.62	2.96	.68	
	5 高齢者は劣っていると思いますか	2.15	.79	2.22	.76	
	6 高齢者は汚いと思いますか	1.78	.72	1.85	.73	
	7 高齢者はひまそうだと思いますか	2.56	.86	2.44	.76	
	8 高齢者はみじめっばいと思いますか	1.66	.72	1.68	.68	
	9 高齢者は優しいと思いますか	3.27	.63	3.29	.68	
	10 高齢者は頑固だと思いますか	3.07	.73	2.94	.64	
障害者	1 障害者はにぶいと思いますか	2.37	.73	2.36	.75	
	2 障害者はよわよわしいと思いますか	2.24	.79	2.16	.73	
	3 障害者はあたたかいと思いますか	2.73	.75	2.85	.73	
	4 障害者は明るいと思いますか	2.82	.71	2.90	.71	
	5 障害者は劣っていると思いますか	2.23	.83	2.25	.66	
	6 障害者は汚いと思いますか	1.8	.78	1.87	.66	
	7 障害者はひまそうだと思いますか	1.63	.67	1.79	.69	+
	8 障害者はみじめっばいと思いますか	1.75	.74	1.82	.73	
	9 障害者は優しいと思いますか	2.8	.68	2.81	.71	
	10 障害者は頑固だと思いますか	2.15	.74	2.29	.74	
子ども	1 子どもはかわいいと思いますか	3.76	.49	3.75	.57	
	2 子どもは元気だと思いますか	3.88	.33	3.77	.53	*
	3 子どもは人なつっこいと思いますか	3.20	.65	3.18	.74	
	4 子どもは大人の言うことをよくきくと思いますか	2.21	.59	2.27	.63	
	5 子どもは明るいと思いますか	3.68	.48	3.60	.61	
	6 子どもは汚いと思いますか	1.55	.64	1.63	.64	
	7 子どもは意地悪だと思いますか	1.98	.87	2.12	.76	
	8 子どもはわがままだと思いますか	2.97	.68	2.93	.63	
	9 子どもは正直だと思いますか	3.37	.69	3.35	.70	
	10 子どもは賢いと思いますか	2.97	.71	3.02	.73	

\*  $p < .05$  +  $p < .10$ 

ようになっていた。他の項目においては、有意な差は見られなかった。

## 2 現場実習に対する不安

見学前と見学後の調査において、項目ごとに「たいへんそう思う」と「少しそう思う」と回答した人数を合計したものと、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」と回答した人数を合計したものをTable 2に示した。X<sup>2</sup>検定の結果、人数の偏りは「実習は心と身体がとても疲れるのではないかと思いますか」において5%水準で有意であった(X<sup>2</sup>(1)=4.13, p<.05)。

見学後の調査において、実習は心と身体がとてもつかれるのではないかと心配する学生が増えたと言える。また、「実習によって評価されることを不安に思いますか」において5%水準で有意であった(X<sup>2</sup>(1)=4.50, p<.05)。見学後の調査において、実習で自分のことを評価されることに対する不安を感じている学生が増えたと言える。さらに、「実習のことを考えると不安なことがたくさんあると思いますか」において10%水準で有意傾向が見られた(X<sup>2</sup>(1)=4.23, p<.10)。見学後の調査において、実習のことを考えると

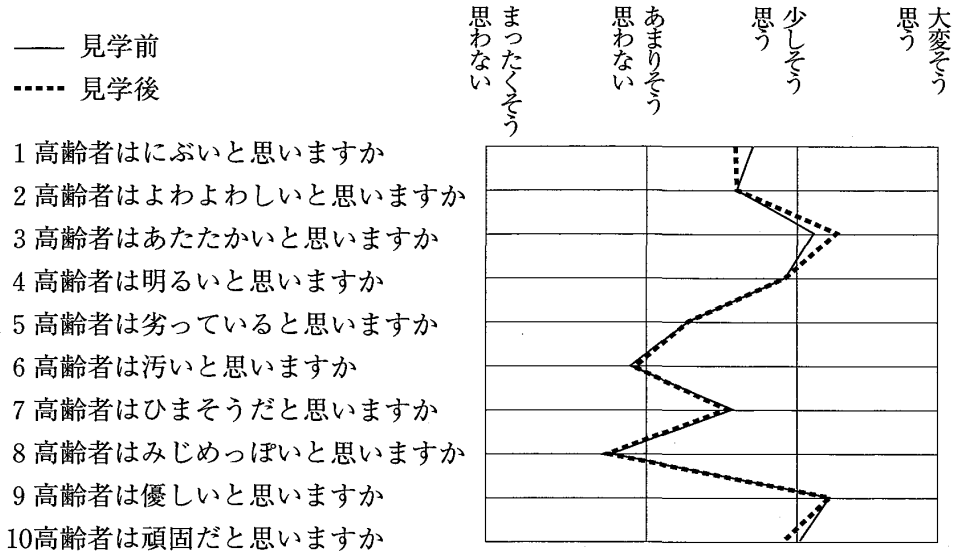


Figure 1 高齢者に対するイメージの平均

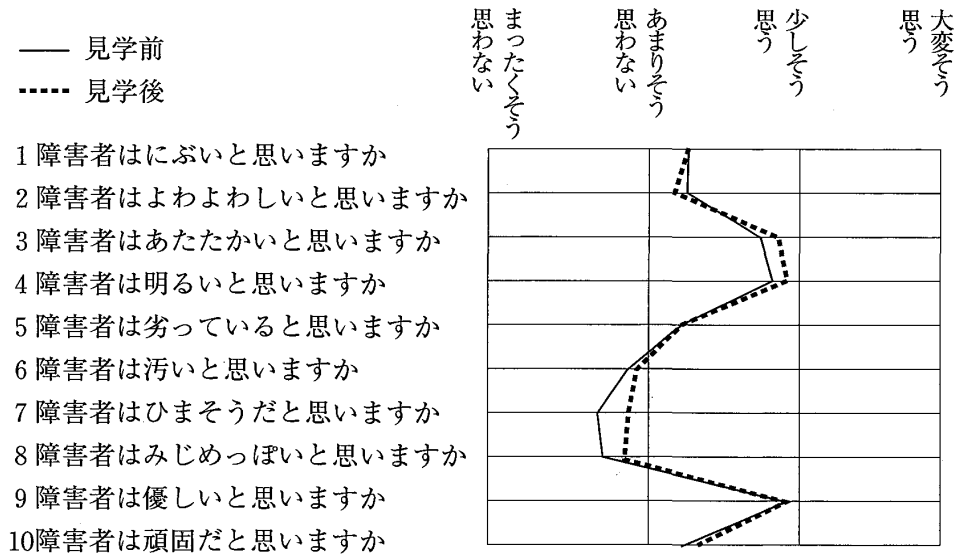


Figure 2 障害者に対するイメージの平均

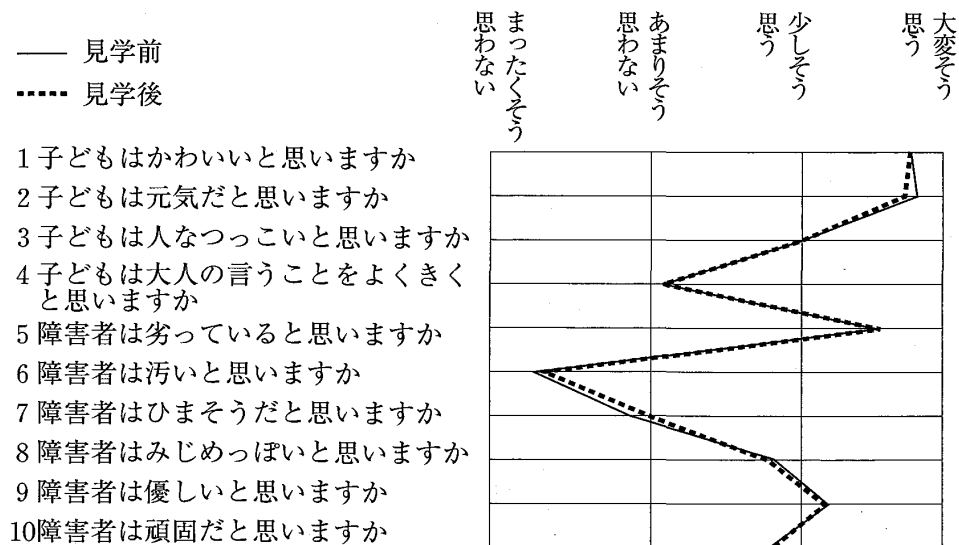


Figure 3 子どもに対するイメージの平均

Table 2 現場実習に対する不安の集計人数と X<sup>2</sup>結果

項目	見学前		見学後		検定
	思わない	思う	思わない	思う	
1 実習を最後までやりとげられるか心配に思いますか	48	75	38	86	
2 実習では心と身体がとても疲れるのではないかと思いますか	23	100	12	112	*
3 実習を待ち遠しく思いますか	50	73	62	62	
4 小さなことでもくよくよと考えてしまう方だと思いますか	41	82	39	85	
5 実習において、他の実習生の言動が気になると思いますか	45	78	46	78	
6 実習で何か失敗をするのではないかと不安に思いますか	21	102	28	96	
7 実習で施設の人に迷惑をかけないか心配に思いますか	22	101	23	101	
8 実習先で利用者とうまくかかわれるか心配に思いますか	29	93	28	96	
9 実習のことを考えると不安なことがたくさんあると思いますか	38	85	24	99	+
10 実習によって評価されることを不安に思いますか	59	64	43	81	*

\*  $p < .05$     +  $p < .10$

不安なことがたくさんあると思うと感じている学生が増えたと言える。

次に、これらの質問項目の構造を明らかにするために、現場実習に対する不安を尋ねる質問紙について、「たいへんそう思う」を4点、「まったくそう思わない」を1点として得点化した。2回の調査別々に主成分分析を行ったところ、各々の調査において、同様の構造が確認された。そこで、見学前の調査と見学後の調査を合わせた246名全体のデータに対し、主成分分析を再度行った。その結果、第1主成分（寄与率39.7%）に対して負荷量の絶対値が高い（.40以上）項目は9項目であった。そこで、これら負荷量の高い9項目のみを用いて、再び主成分分析を行ったところ、寄与率は44.1%に上昇し、第1主成分に対する負荷量が高い項目は9項目であった（Table 3）。そのため、本研究では、これら9項目を用いて、この尺度の項目として使用することにした。尺度の信頼性を検討するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha = .83$ であった。高い内的一貫性が保証されていると考えられるため、これらの項目の得点で方向を揃えて合成得点を算出し、現場実習に対する不安尺度の得点とした。見学前と見学後の調査において、現場実習に関する不安に変化

があったのかを検討するために、1要因の分散分析を行った。その結果、見学前と見学後の間には有意な差は見られなかった（Table 4）。

### 3 自己効力感

一般性セルフエフィカシー尺度は既存の尺度であるが、因子構造の確認のために「たいへんそう思う」を4点、「まったくそう思わない」を1点として得点化し、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。2回の調査別々に因子分析を行ったところ、各々の調査において、同様の因子構造が確認された。そこで、見学前と見学後の調査を合わせた246名全体のデータに対し、因子分析を再度行った。その結果、1つの因子においてのみ、.40以上の因子負荷量を示したものをその因子の項目とし、3因子を抽出した。これは、坂野ら（1986）が提唱している因子構造と一致するものであった。結果をTable 5に示す。

項目内容を検討した結果、第1因子は、「小さな失敗でも人よりずっと気にする」など5項目の因子負荷量が高く、失敗を恐れる感情を意味していると解釈できる。よってこの因子は「失敗に対する不安」と命名した。第2因子は、「友人より優れた能力がある」など6項目の因子負荷量が高く、自己の肯定的感情と解釈でき

る。よってこの因子は「能力の社会的位置づけ」と命名した。第3因子は、「どんなことでも積極的にこなすほうである」など3項目の因子負荷量が高く、前向きな活動性を意味していると解釈できる。よってこの因子は「行動の積極性」と命名した。各因子の信頼性を検討するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子は $\alpha = .83$ 、第2因子は $\alpha = .74$ 、第3因子は $\alpha = .74$ であった。見学前と見学後の調査において、一般的自己効力感に変化があったのかを検討するために、1要因の分散分析を行った。その結果、見学前と見学後の間には有意な差は見られなかった (Table 6)。

#### 4 現場実習に対する不安と自己効力感との関係の検討

今回はいずれの因子においても信頼性があると判断されたため、そのままの項目を用いて合成得点を算出することとした。合成得点は因子分析結果に基づき、下位尺度に含まれる項目を方向を揃えて単純合計して算出した。現場実習に対する不安と自己効力感との関係を明らかにするために、各調査ごとに、現場実習に対する不安尺度得点と自己効力感の下位尺度得点との相関を求めた。その結果、見学前の調査では、現場実習に対する不安と「失敗に対する不安」が1%水準で有意な正の相関が見られた。また、現場実習に対する不安と「行動の積極性」「能力の社会的位置づけ」において、それぞれ1%水準で有意な負の相関が見られた。さらに、見学後の調査でも、現場実習に対する不安と「失敗に対する不安」との間に1%水準で有意な正の相関が見られた。また、現場実習に対する不安と「行動の積極性」「能力の社会的位置づけ」において、それぞれ1%水準で有意な負の相関が見られた。結果をTable 7に示す。

##### <考察>

本研究では、人間福祉学科の学生において、施設見学を行なう前と施設見学を行なった後の心的状態を明らかにすることを目的とした。とりわけ、高齢者、障害者、子どもに対するイメージ、現場実習に対する不安、自己効力感に焦点をあて、検討を行なった。

##### 1. 高齢者、障害者、子どもに対するイメージ

大学生が抱く高齢者、障害者、子どもに対するイメージを明らかにするために、それぞれ10項目を用いて検討した。見学前の調査と見学後の調査において、高齢者、障害者、子どもに対するイメージは、ほとんどの項目において変化がなかったと言える。見学実習では、学生が直接利用者に一個人としてそれほど深く携わっていない。そのため、見学実習を経験することは、彼らの抱く利用者に対するイメージにあまり影響を与えなかったのではないかと推察される。以下で、高齢者、障害者、子どもに対するイメージのそれぞれへの考察を行なう。

##### 1) 高齢者に対するイメージ

従来の高齢者のイメージ研究の多くにおいて、若者は高齢者に対して否定的なイメージをもつことが報告されている (佐藤・長嶋, 1976, 保坂・袖井, 1988)。山崎 (2001) の社会福祉学科学生の老人イメージの自由記述における研究でも、全体の約9割が否定的なイメージを述べており、肯定的なイメージは「温かい、やさしい、温和、お金をもっている」など数少ないものであった。他方、本研究では、学生が高齢者に対して「あたたかい、やさしい」というイメージが強く、「みじめっぽい、汚い」という否定的なイメージをあまり抱いていないことが明らかになった。これは本大学の学生の特徴とも言えるだろう。特に、「高齢者はあたたかいと思いますか」という項目について、見学前の調査よりも見学後の調査の方が、よりあたたかいというイメージに変わるという有意な傾向が見られた。これは、大学の授業において、高齢者の生活状況や性格に関する知識を吸収したり、実際に高齢者施設を見学し、高齢者に触れ、会話したりすることにより、高齢者へのあたたかなイメージを形成させたのではないかと考える。しかし今後、高齢者福祉施設において実習を重ね、直接高齢者と関わる機会を増やすことにより、高齢者と長時間かかわることになる。そのことにより、高齢者のことを援助を求めている要求の多い存在、弱い存在として認識し、「あたたかい、やさしい」というイメージを変化させる可能性も考えられる。

##### 2) 障害者に対するイメージ

Table 3 現場実習に対する不安尺度各項目の基礎統計ならびに主成分分析の結果

項目	見学前		見学後		第一主成分負荷量
	M	SD	M	SD	
1 実習を最後までやりとげられるか心配に思いますか	2.65	.84	2.78	.84	.56
2 実習では心と身体がとても疲れるのではないかと思いますか	3.06	.75	3.24	.62	-
3 実習を待ち遠しく思いますか	2.71	.76	2.6	.73	-
4 小さなことでもくよくよと考えてしまう方だと思いますか	2.89	.92	2.87	.92	.49
5 実習において、他の実習生の言動が気になると思いますか	2.75	.92	2.64	.88	.69
6 実習で何か失敗をするのではないかと不安に思いますか	3.14	.83	2.99	.88	.77
7 実習で施設の人に迷惑をかけないか心配に思いますか	3.09	.80	3.11	.82	.78
8 実習先で利用者とうまくかかわれるか心配に思いますか	3.05	.87	3.12	.87	.76
9 実習のことを考えると不安なことがたくさんあると思いますか	2.94	.89	3.1	.82	.76
10 実習によって評価されることに不安に思いますか	2.59	.86	2.76	.79	.71

$\alpha = .84$

主成分分析には2回目のデータを使用した

Table 4 現場実習に対する不安尺度の平均と標準偏差

		M	SD
現場実習に対する不安	見学前	26.15	5.07
	見学後	26.60	4.90

障害者に対しては、「明るい、やさしい、あたたかい」というイメージが上位を占めていた。これらのことから、本学の学生は障害者に対してポジティブなイメージをもっていたと言えるだろう。松村（2002）が行なった大学生を対象とした知的障害者のイメージの研究では、大学生は知的障害者に対して、ややネガティブなイメージをもっていたと報告されている。本研究はその結果とは少し異なるものであった。これは今回の調査では障害者を知的障害者のみに規定せず、知的障害者と身体障害者両方を含ませ

ていることに起因すると考えられる。障害者を知的障害者か身体障害者のどちらかに限定した方が具体的な知見が得ることができたと推測されるため、今後の検討課題としたい。見学前の調査と見学後の調査で、ほとんどのイメージに変化がなかったが、「障害者はひまそうだと思いますか」という項目について、見学前の調査よりも見学後の調査において、障害者をよりひまそうだと思う方向にイメージが変わるという有意な傾向が見られた。この理由として、見学実習などで知的障害者施設を見学し、障害者の生



Table 5 自己効力感尺度の各項目の平均と標準偏差, 及び因子分析の結果

項目	見学前		見学後						
	M	SD	M	SD	F1	F2	F3	h <sup>2</sup>	
<F1 失敗に対する不安> $\alpha=.83$									
14 小さな失敗でも人よりずっと気にする	2.74	.97	2.59	.95	.81	-.18	-.04	.67	
5 人と比べて心配性なほうである	3.10	.93	3.04	.80	.71	-.03	-.12	.52	
7 何かをするとき, うまくゆかないのではないかと不安になる	2.86	.81	2.80	.81	.66	-.23	-.12	.51	
4 仕事を終えた後, 失敗したと覚えることのほうが多い	2.46	.80	2.38	.80	.61	-.21	-.16	.45	
2 過去に犯した失敗やいやな経験を思い出し, 暗い気持ちになることがよくある	2.82	.85	2.78	.81	.60	.03	-.23	.42	
<F2 能力の社会的位置づけ> $\alpha=.74$									
3 友人より優れた能力がある	2.24	.81	2.40	.84	-.06	.78	.27	.69	
12 友人よりも特にすぐれた知識をもっている分野がある	2.33	.86	2.35	.88	.00	.64	.23	.47	
9 人より記憶力がよいほうである	2.11	.80	2.14	.81	-.15	.44	.06	.22	
6 何かを決めるとき, 迷わずに決定するほうである	2.15	.82	2.20	.87	-.39	.42	.06	.34	
1 何か仕事をするとき, 自信をもってやるほうである	2.77	.76	2.74	.69	-.21	.40	.25	.27	
16 世の中に貢献できる力があると思う	2.78	.74	2.72	.80	-.15	.40	.32	.28	
<F3 行動の積極性> $\alpha=.74$									
13 どんなことでも積極的にこなすほうである	2.53	.71	2.60	.77	-.19	.28	.76	.69	
15 積極的に活動するのは, 苦手な方である(R)	2.39	.83	2.40	.88	.27	-.19	-.68	.57	
10 結果の見通しがつかない仕事でも, 積極的に取り組んで行くほうだと思う	2.76	.75	2.60	.76	-.05	.17	.51	.29	
寄与率 (%)					18.2	16.0	11.4		

(R) は逆転項目

因子分析には2回目のデータを使用した

活や特徴に触れることにより, 自分たちの大学生活とは異なるゆったりした時間の流れがあることを感じた可能性があげられる。つまり, 学生たちは障害者に対して, 日々, 大学の授業やバイト, サークル活動に追い立てられている「自分たちよりも暇」というふうに捉え, それぞれがイメージに反映されたのかもしれない。

### 3) 子どもに対するイメージ

子どもに対しては, 「元気, かわいい, 明るい」というイメージがとても強いことが明らか

になった。岡野(2003)は, 大学生が抱く子どもに対する代表的なイメージは「元気, かわいい」であり, 「明るい」も多く見られることを明らかにしている。本研究でも同様の結果が見られたと言える。しかし, 「子どもは元気だと思いますか」という項目については, 見学前の評定と見学後の評定において, 5%水準で有意な変化が見られた。つまり, 見学後の評定が見学前の評定よりも有意に低下したのである。調査対象の学生は, もともと, にこにこ走り回

Table 6 自己効力感尺度の平均と標準偏差

	失敗に対する不安		能力の社会的位置づけ		行動の積極性	
	M	SD	M	SD	M	SD
実習前	16.44	3.75	9.57	2.56	7.58	2.00
実習後	16.20	3.37	9.71	2.63	7.41	2.12

Table 7 現場実習に対する不安と自己効力感との相関

		失敗に対する不安		能力の社会的位置づけ		行動の積極性	
現場実習に対する不安	実習前	.62	**	-.42	**	-.33	**
	実習後	.61	**	-.43	**	-.41	**

\*\* p &lt; .01

る子どもの姿を抱いていたと考えられる。しかし、見学実習前後の授業や見学実習などで虐待を受けた子どもたちや親と一緒に暮らせない子どもたちの行動特性を知ることになる。このような見学実習やその関係授業が「元気でない子ども」の存在を認識させることになり、学生が抱いていた「子どもは元気」というイメージに大きく影響を与えたのではないかと推測される。

## 2. 現場実習に対する不安

本学科では、1年次においては、福祉に関する基本的な知識や技術を獲得すると同時に、見学実習において福祉現場を経験することによって2年次以降に行なわれる現場実習への準備を整えていく。その過程において、学生は現場実習に対する不安をどのように変化させていくのかを明らかにするために、現場実習に対する不安尺度を作成し、検討を行なった。各項目において、見学前と見学後について人数の偏りを検討するために $\chi^2$ を行なったところ、「実習は心と身体がとても疲れるのではないかと思いますか」「実習によって評価されることを不安に思いますか」という項目において5%水準で有意な差が見られた。つまり、見学後の調査時の方が、これらの項目をより不安に思い、心配していたことが示唆された。また、「実習のことを考えると不安なことがたくさんあると思いますか」において、見学前よりも見学後の方が、平

均が高く、有意な傾向が見られた。その後、項目を合計し、現場実習に対する不安を尺度としてとらえ、見学前と見学後を比較するために分散分析を行ったところ、現場実習に対する不安に有意な変化は見られなかった。これらのことを鑑みると、学生は、現場実習が近づくとつれ、少しずつ不安を感じてはいるものの、約10ヵ月後に控えた現場実習に対する不安はそれほど切実なものではないと推察される。次回の研究では、この不安が現場実習前にどのように変化するのかを検討することが望まれる。また、本研究で明らかにされた現場実習に対する不安は、他者に迷惑をかける不安というよりも、自分が弱ったり、疲れたり、評価されたりする不安であり、自分のことに関する不安であると指摘できる。現場実習における指導において、このような不安を少しずつ軽減させ、積極的な実習を行なえるように導くことが必要であろう。

## 3. 自己効力感

現場実習では、大学生は自らの力で実習を行なわなくてはならない。そこで重要となってくるのは、自分が実習をできるという自己効力感である。本研究では、一般性セルフ・エフィカシー尺度を用いて、大学生の自己効力感の測定を行なった。その結果、尺度は坂野ら(1987)と同様の因子構造が確認でき、3つの因子から構成された。この自己効力感が施設見学を経験することによって、どのように変化するのかを

検討した。その結果、見学前と見学後の調査において、自己効力感に有意な変化は見られなかった。学生は施設見学を行なうことによって、福祉現場の知識や経験を蓄積しているのだろうが、施設見学はグループ単位で行なっており、個人の自己効力感に影響を与えるようなものではなかったと考えられる。さらに、この自己効力感が現場実習に対する不安とどのように関係しているのかを明らかにするために、自己効力感の下位尺度と現場実習に対する不安尺度との関係を検討した。その結果、見学前、見学後の調査どちらともにおいて、現場実習に対する不安とすべての下位尺度において1%水準で相関が見られた。これは、現場実習に不安が高いほど、失敗に対する不安が高いこと、行動の積極性が見られないこと、自己の能力を低く評価していることを意味している。今後、彼らの自己効力感を高め、現場実習に対する不安を軽減する方向で授業をすすめていくことが求められる。

最後に、本研究は、学生における見学実習前と見学実習後の高齢者、障害者、子どもに対するイメージ、実習に対する不安、自己効力感の実態を明らかにし、その経時的変化を明らかにすることを目的とした。今後、学生が現場実習を修了するまで同様の調査を定期的に行い、社会福祉専攻である学生が抱いている現場実習に対する心的状態の変化などを検討することを予定している。このような縦断的調査を行なうことは学生の理解を深めるとともに、今後の社会福祉現場実習における学生への援助、支援の方向性を示唆することになり、効果的な実習教育を構築させることの一助となるであろう。

#### <引用文献>

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 保坂久美子・袖井孝子 1988 大学生の老人イメージ *社会老年学*, 27, 22-25.
- 河野理恵・太田信夫 2003 青年が抱く中年イメージと高齢者イメージ—日本とカナダのデータより— *筑波大学心理学研究*, 26, 75-82.
- 松村孝雄・横川剛毅 2002 知的障害者のイメージとその規定要因 *東海大学紀要*, 77, 101-109.
- 岡野雅子 2003 子どもに対するイメージ—女子学生と幼稚園児母親との比較と保育教育への示唆— *信州大学教育学部紀要*, 110, 57-67.
- 坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み *行動療法研究*, 12, 73-82.
- 佐藤泰道・長嶋紀一・小野寺富男 1976 老化イメージ (3) 形容詞対による評定について *浴風会調査研究紀要*, 59, 73-76.
- 鈴木麻耶 2002 社会福祉実習生の不安について *東洋大学社会学部紀要*, 40 (3), 151-171.
- 豊嶋三枝子・堤かおり 2005 看護学実習における学生の自己効力感に影響する要因—インタビュー内容の分析— *日本看護学教育学会誌*, 14 (3), 19-30.
- 山崎章恵・阪口しげ子・百瀬由美子 2001 看護学生の自己効力感を高める実習指導の検討—自己効力感が低い学生の実習中の体験から— *信州大学医療技術短期大学部紀要*, 27, 41-48.
- 吉井紀子・野本ひさ・河野保子 2001 看護学生の臨地実習における自己効力感の推移—1年次から4年次にわたる縦断的調査— 第27回日本看護研究学会学術集会—プログラム及び内容要旨—, 24 (3), p.174.
- 1) 施設見学は「社会福祉援助技術現場実習」という科目の中に含まれている。
  - 2) 詳細な基本的属性、希望する実習先などについては、目白大学総合科学研究第2号「社会福祉実習の効果に関する研究—社会福祉援助技術に基づく評価項目の検討—」を参照のこと。